

千政煥・蘇榮炫・林泰勲編

『文学史以後の文学史——韓国現代文学史の解体と再構成』
ブルン歴史、二〇一三年

천정환・소영현・임태훈 『문학사 이후의 문학사.. 한국 현대문학사의 해체와 재구성』 푸른역사, 二〇一三年

高 榮蘭



近年、日本語空間において、日本語で受容されたテキストを対象とする「文学史」が編纂されたというお話はあまり聞かない。

出版社主導の講座シリーズもあまり見られない。しかし、その一方で、教育現場で「文学史」という枠による授業の必要性が消えることはなく、「日本文学—国文学」系の大学院入試では文学史に関する知識が問われ続けている。その場合、内容のレベルで大切にされるのは、特定のテキストに依拠するというより、授業を行う側、試験問題を作る側の研究経験や教育経験に基づいた感覚である。もちろん、その感覚自体は歴史的・文化的な文脈から自由ではない。教える／教わるという関係性の中に閉じ込められ、新

たな情報の更新が行われない、まるでゾンビのような生き物としての「文学史」。それに対する戸惑いが日本語空間だけの問題ではないことを、韓国の近現代文学をめぐる『文学史以後の文学史——韓国現代文学史の解体と再構成』（千政煥・蘇榮炫・林泰勲編、ブルン歴史、二〇一三年）から確認することができる。

まず、「はじめに」に基づいて、この本のコンセプトを確認しておきたい。タイトルの「文学」とは「韓国現代文学」のことであり、「文学史以後」は「近代文学の終焉」宣言以後の、韓国現代文学通史の書かれない時代を意味する。韓国文学史が書かれなくなった理由については、文学史とは総合的な知識と歴史に対する

一貫した観点に基づいて書かれるべきものであるのに、これまで「文学史」を支えていた認識論が古くなってしまったからだという。すでに死亡宣告を受けた知の体系が抑圧となり、いま・ここで効力を発揮する状況への疑問から、この企画が発していることが強調されている。

新たな「文学史」をめぐる模索は、制度的な規範の強い教育現場から離れた空間からスタートしている。「文学史以後の文学史」という有料講座がプルン歴史アカデミーという市民のための人文学空間で、二〇一一年十一月から二〇一二年十二月までの間、毎週月曜日午後七時三〇分から十時まで行われた。この本は、第五シーズンまで続いた講座の第一・第二シーズンの講義と議論をそのまま掲載する形をとっている。出版元は講座が開かれた場所を提供しているプルン歴史という出版社である。プルン歴史アカデミーでの講座企画がすべて単行本として出版されているわけではないことを考えると、この講座が最初から出版を目標としているとは言いにくい。

この本は、歴史書でよく採用される編年体の形式をとらない。また、企画側があらかじめ「文学史」記述に必要な項目を決め、それに基づいて依頼をしているわけでもない。ここに参加する研究者・創作者・批評家個々人がこれまで蓄積してきた言葉の束を紐解く場、すなわち、それぞれの研究や創作に「文学史」という

キーワードを与えたとき、どのような新しい展開が期待できるのか、それを試す場になっている。編者や著者は、本のコンセプトと同様、二〇〇〇年代以後に研究の場に参入した人々がほとんどであるため、三十代から四十代という比較的若手の研究者で構成されている。

編者側が前景化させているのは「民衆の文学史、女性の文学史、ネットワークとしての文学史、下からの文学史、非線形的な文学史、トランスナショナルな文学史」への模索である。少し長くなるが、目次を紹介しておきたい。第一部「文学史をみる異なる観点」…権ボドウレ「文学の散布あるいは文学の孤独——三・一運動前後から今を眺める」、千政煥「サバルタンは書くことができるのか——「文学と政治」を見る異なる観点と民衆文学の復権」、蘇榮炫「文学史の他者たちを捉え直す——文学史から文学史「たち」へ」。第二部「新たな問題の枠組みから読む韓国現代文学史の論点」…李惠鈴「植民地時代の小説を読み直す——廉想渉文学を通して見た植民地の語りと社会主義者」、辛炯基「一九六〇年代の「物語」と四・一九、五・一六革新言説の行方」、權明娥「文学「共同体」の外部にいる書き手の文学物語——文書庫と生のあいだの文学」。第三部「複数の文学史と異なるジャンル」…白文任「文学史と映画史——林和が朝鮮映画について語ったこと」、李英美「言葉の文学／文章の文学、韓国文学史の新たな枠組みをつくる——

「裸足の青春」と「棒の乙女」、鄭ヨウル「フアクション共和国で歴史小説を読む」。

目次からもうかがえるように、ここでの問いには日本の近現代文学研究との接点が大いにある。例えば、三・一独立運動によって可視化される同人誌やメディアの問題（權ボドゥレ）、一九八〇年代における下位主体としての女性労働者と文学実践の問題（千政煥）、村上春樹の受容を手がかりとしながら「翻訳」を媒介とする民族や言語の境界を超える形で編成される文学史と移住労働者の問題（蘇榮炫）、「社会主義者」表象の不／可能性や「日本人―植民者」表象の不／在の問題（李惠鈴）、一九六〇年の四・一九革命の主体による手記の分析の問題（辛炯基）、第一世代フェミニストによる「シングル・ライフ」という政治的決断をめぐる表象と現代女性作家による文学実践の問題（權明娥）などがそれである。本書に散りばめられたキーワードから浮かび上がるのは、日本近現代文学研究においても展開された、読むことと書くことのあいだを問う読者―共同体をめぐる研究、綴り方、サークル誌などの研究、ジェンダー研究、サブカルチャー研究との対話の必要性である。

日本帝国の植民地であった時期と、「村上春樹」の受容が生じた二〇〇〇年代以後を同じ土台で捉えることはできない。蘇榮炫は、韓国における「村上春樹」現象は韓国文学の新しい書き手の不在、

そして中堅作家のスランプの重なりから抜け出すための市場戦略の両面から考えるべきだという。蘇が注目しているのは、春樹の成功が新たな書き手の出現と彼ら／彼女らの小説の書き方にいかなる影響を与えていたのかである。その意味において、村上春樹は韓国文学史の枠組みで考え得る作家になるのである。それは植民地の書き手、帝国の検閲システム、植民地生まれの書き手が活躍した一九六〇年代とは明らかに違う文脈である。また、この現象を喜び、優れた・面白い日本文学の東アジアにおける成功例として捉え、「世界」各国の事例とともに並べるといふ単純な発想に陥ってはならない。

この本の中で交錯している「過去」と「現在」には「日本」「日本語」「日本文学」「日本人」が細かく散りばめられている。しかし、はたして日本近現代文学の研究手法との同時代性が見られる『文学史以後の文学史——韓国現代文学史の解体と再構成』との対話の土台が、日本の近現代文学において用意されているのだろうか。むしろ、植民地や東アジアの問題を「日本語文学」という用語やポストコロニアルという概念で括り、過ぎ去った流行として忘却しつつあるいま、韓国から発信された韓国近現代文学の歴史は見なくてもよい、考えなくてもよい、過去の研究方法の範疇として処理される危険性があるのではないだろうか。この現象とはあきらかに異なる形で、人文系の生き残りをかけた競争的―狂騒

的な研究資金の獲得が生み出す様々な国際会議の場は膨大に増え、異なる言語圏を生きる研究者の出会いの場は増えつつある。しかし、それが、お互いの国家・領域の尊重を担保とするものになりやすいことを考えると、この本を媒介に強く意識させられる「非同時的なものの同時性」の感触にいかに応答すべきなのかは、「われわれ」に残された課題であり続けるだろう。